

多数的か？複数的か？：二つのポスト・マルクス主義

大賀, 哲
神戸大学

<https://hdl.handle.net/2324/1932631>

出版情報：情況. 8 (4), pp.135-147, 2007-05-21. 情況出版
バージョン：
権利関係：



多数的か？複数的か？——二つのポスト・マルクス主義

大賀 哲

Oga Toru

神戸大学（国際政治学）

ビック・マックはさておき、ずっと把握が困難だったのはトランスナショナルな帝国主義だった。このあたらしい帝国主義は、金・価値、そして権力のグローバルな流れに反応し、同時にその流れを規定するという一連の現象であった。簡潔にも『帝国』と題し、二〇〇〇年に発表された研究は、これまでのような領域的境界をもたないトランスナショナルな資本、国際組織、政治勢力等についてマルクス主義流の視点を提示した。この議論には、たとえば脱領域化など、よく知られた筋書きとともに、S・F・映画であるかのようなものもある。それは「帝国」という概念が世界を支配し、「一般大衆」のみが潜在的な抵抗勢力として残っているというのだ。著者は、もし「一般大衆」が十分に戦闘的で、「帝国」の世界支配に立ち向かうなら、勝ち目があると結論した。ぜひそう願おう……。

——キャロル・グラック⁽¹⁾——

はじめに——単数・複数・多数のデモクラシー

日本史業界に縁遠い読者にとっては、キャロル・グラックは馴染みの薄い名前かもしれない。勿論、この歴史家の皮肉のこもつ

た『帝国』批判を門外漢の戯言として一蹴することは容易い。しかし彼女の素朴な違和感は、マルクス主義やポストモダニズムの物語を共有しない人間から提起された疑義としては非常に示唆的であるし、これまでマルクス主義やポストモダニズムがそうでない人々を十分に魅了し得なかった理由を考える上でも有益である。

グラックは歴史を「白か黒か」「全か無か」といった二分法で断定的に語る論法を「二者択一症候群」と呼んでいる。彼女の違和感を要約すれば、ハート・ネグリは黙示録的な論調を駆使しながら、グローバル化の物語に対抗する反物語を構成している——これは結局、二者択一症候群の亜種であろう。暴力的な〈帝国〉の支配に立ち上る多数者たち！グラックが忌避しているのはこうした超越論的視座である。それ故に彼女がポストモダニズムを指して、「変わりゆく近代を語る世界言語の一つの方言」と揶揄したことは驚くにあたらない⁽²⁾。これまでマルクス主義の思想圏から売り出された多くの物語がそうであったように、「反〈帝国〉のマルチチュード」という物語を共有できない人々の耳には、ハ

ート・ネグリの黙示録は届かない。

このことはデモクラシーにもあてはまる。グラックの論点をデモクラシー論に植え替えれば、伝統的にデモクラシー論は二者択一候補群がまわり付いていたということである。デモクラシーはデモスに属する市民により構成される。そしてデモクラシーはデモスに属する市民とそうでない非市民という境界線を必要とする。カール・シュミットに倣えば、このことは次の背理を生む。一方でデモクラシーは市民を市民として取り扱う。同時に、それは市民でないものは市民として取り扱わないということを含意している。即ち、その論理的帰結としてデモクラシーには、市民／非市民の審問を絶えず繰り返す境界線の政治が埋め込まれている。

ここで心ある者は「境界線なきデモクラシー」——想定される市民／想定されざる市民という二分法を超えた公共圏——を創出すれば良いではないかという誘惑に駆られる。だが、これは早計である。なぜならば、境界線を乗り越えようとすること自体が、境界線を乗り越えられない人々との間に新たな境界線を生むからである。こうした境界線なき政治への誘惑こそがコスモポリタニズムやリベリズムが偏狭な宗教原理主義や民族主義と対話の回路を閉ざしてしまう当のものであり、ラディカル・デモクラシーが批判してやまないものである。

さて従来のデモクラシー論の枠組みにラクラウ・ムフのラディカル・デモクラシー、ハート・ネグリの絶対的民主主義の枠組みを加えれば次の三つのデモクラシー論の類型が与えられる。第一

な磁場なのである。

本稿では、上述の問題意識を受けて、二つのポスト・マルクス主義（ハート・ネグリとラクラウ・ムフ）を対比することを試みる。周知のようにハート・ネグリが多数性（Multitude）から論を立てているのに対し、ラクラウ・ムフは複数性（Plurality）から議論を展開している。この二つの思想圏は共に従来のマルクス主義を乗り越え、それぞれ別の形ではあるが解放を模索したものである（ハート・ネグリの所論にもまた「ポスト・マルクス主義」という言葉が散見される³⁾）。ではこの二つのポスト・マルクス主義はいったい何を指し、そこにはどのような違いがあるのか。また両者は今日の知的ヘゲモニーになりつつある「単数のデモクラシー論」をどのように捉えているのか。筆者はラクラウとムフのポスト・マルクス主義ないしラディカル・デモクラシーの骨子については以前の論稿で既に論じているので⁴⁾、本稿では前著論文との反復を避けながら、ハート・ネグリの所論に反駁するラクラウ・ムフのまなざしを再現しながらラディカル・デモクラシー論の射程を捉えていきたい。

一 デモクラシーの危機

本節ではハート・ネグリのデモクラシー論と、ラクラウ・ムフのデモクラシー論を概観するが、両者に共通しているのは、デモクラシーは今日危機に瀕しており、彼らの回答はそれぞれ「デモクラシーの危機への応答」を構成しているという点である。ハート・ネグリは「帝国」⁵⁾において既存の国民国家の主権概

は単数のデモクラシー。即ち熟議・討議・審議的デモクラシー（Deliberative Democracy）の系譜である。第二は複数のデモクラシー、ラクラウとムフが根源的民主主義と呼ぶものである。そして、第三の類型が多数のデモクラシー、ハート・ネグリが自信を込めてマルチチュード、絶対的民主主義と呼ぶものである。

本特集におけるムフの所論は第三の多数のデモクラシーが、実は第一の単数のデモクラシーと変わらない、というものであった。このこと自体がまさにデモクラシーの病理を表象している。単数のデモクラシーが想定する市民とは、政治的熟議の場に積極的に関与して、本質化されたアイデンティティを固着化させずに自己の意見を変容させていく主体である。このことはその必然の帰結として自己のアイデンティティを柔軟に変容できない主体——例えば偏狭なナショナリスト——を対話不可能な相手としてその公共圏の外側に位置付ける。同様に多数のデモクラシー、この立場もまたマルチチュード——各々の差異を美徳として受け入れ、グローバル化の暴力に抵抗を形成していく主体——をア priori に想定している。それ故に、これまたその論理的帰結として他者との差異を美徳として受容することが出来ず、自己のアイデンティティを硬く信じ込んでいくような主体をその連帯の埒外に置く。これら単数の、そして多数のデモクラシーに共通していることは、対立や敵対（所謂、「政治的なもの」）が除去可能なものという楽観である。熟議や連帯に柔軟に対応できる主体を想定することは、言うまでもなくそうでない主体との間に軋轢を生むこととなる——このことこそが、ラディカル・デモクラシーが問題視する最も深刻

念と単一的に「国民」へと還元されるデモクラシー概念をほぼ完全否定した後、その瓦礫の上から新たなデモクラシー論——「グローバル・デモクラシー」ないし「絶対的民主主義」と呼ばれるもの——を再構築する。そして「マルチチュード」⁶⁾においてこの新たなデモクラシー論を更に再構築している。

彼らにとって、これらの新たなデモクラシーは「国家と国民」を中心に構成されたデモクラシーとは異なるものでなければならぬ⁷⁾。なぜならば、現行の民主主義は「国民」という単一の枠組みに還元され得るからである。そして誰が誰を代表するのかといったお馴染みの問いは国民国家に限定された問いかけであり、グローバルなレベルでは意味を持たない⁸⁾。彼らがグローバル・デモクラシーの主体として設定するのが「国民」ではなくマルチチュードである。

しかし、グローバル・デモクラシーや絶対的民主主義とはどのようなもので、どのように具現化可能であるのかといった点についてはハート・ネグリは恐ろしく寡黙である——たいていマルチチュードや絶対的民主主義というファジーな言葉でお茶を濁している。ハート・ネグリは、絶対的民主主義とは「生政治の生産を通じて社会を協同的に創造し維持するという民主主義」⁹⁾であり、更に「主権を超えた世界、権威を超えた世界、あらゆる専制を超えた世界」、であると述べている¹⁰⁾。彼らの絶対的民主主義の所論を因数分解していけば二つの素朴な議論の奇妙な組み合わせ——それらはお互い矛盾すると言えば言い過ぎだが、相容れないものでもある——に辿り着く。それは〈帝国〉を乗り越えマルチチュ

ドの解放を唱導する壮大さと、マルチチュードという権利の請願を通じて〈帝国〉への異議申し立てを不断に続けていくという陳腐さの組み合わせである。一方で彼らは次のように論じている。

私たちはただ破壊的だけでなく、それ自体が構成的権力の形態であるような武器、すなわち民主主義を構築し〈帝国〉の軍隊を打ち破る能力をもった武器を創造しなければならない（中略）一週間グローバルな生政治的ストライキを行えば、どんな戦争もやめさせることができるはずだ。⁽¹¹⁾

しかし、他方で彼らの言うところの「生政治的生産を通じて社会を協同的に創造」することの本身は、権利の請願・陳情書の類以上のものではない——具体的に言えばグローバル市民権、最低限の収入、教育・情報・コミュニケーションへのアクセス及び管理⁽¹²⁾。更にトランスナショナルな社会運動に共通する三つの異議申し立てとして、代表制への批判・貧困への抗議・戦争反対を挙げている⁽¹³⁾。〈帝国〉への秀逸な分析と比べると、恐ろしく陳腐な回答である。そして次のように述べている——「これらの異議申し立てのひとつひとつの内に民主主義のプロジェクトが宿っており、あまたの闘争はマルチチュードの（肉）の一部をなしている」⁽¹⁴⁾。こうした壮大さと陳腐さの奇妙な組み合わせに対しては、直ちに判断を下すことは難しい。ただハート・ネグリの描いている現実的な見取り図は、その重厚長大な分析とは裏腹に実はまったく慎重しやかなものではないか、という一つの可能性が浮上する。

「絶対的民主主義」と呼んでいるだけではないのかという疑問である。そして、第二はどのようにグローバルな場で展開されるマルチチュードの絶対的民主主義には、権力／抵抗という対置と、その素朴な二項対立の優劣逆転がないだろうか、という疑問である。勿論、絶対的民主主義——それが単にトランスナショナルな社会運動を総称する名に過ぎないとしても——否定するつもりはない。ただ、もし絶対的民主主義の構成に〈帝国〉の権力と暴力への抵抗線を形成するという一種の樂觀があるとすれば、それは警戒に値する。

こうした樂觀論への警戒を最大限に強調しているのが、シャタル・ムフである。彼女にとってハート・ネグリのプロジェクトは「第三の道」の焼き直しに過ぎない。この論理を理解するためにはそもそもラクラウとムフが拠つてたつ政治観を理解する必要がある。かつて、ラクラウとムフは「ポストマルクス主義と政治」⁽¹⁸⁾において二つの危機を論じた——社会主義の危機と民主主義の危機である。そうであるが故に、ラクラウとムフの議論はこの二つの危機を如何にして克服し得るのかという特定の磁場から議論が展開される。言い換えれば、ラクラウとムフのポスト・マルクス主義やラディカル・デモクラシーの論理は、マルクス主義におけるポスト・マルクス主義、そしてデモクラシー論におけるラディカル・デモクラシーという二つの問いから構成される。では、ラディカル・デモクラシーにおけるデモクラシー論——これは主にムフの議論であるが——はどのように現行のデモクラシーを捉えているのか。

シアトルの抗議行動について彼らはその異議申し立ての性質について次のように論じている。

シアトルでの不思議で魅力的な力は、これらのおびただしい異議申し立てが単なる寄せ集めの種々雑多な声のかもしれない出ず不協和音ではなく、グローバル・システムに対する〈共〉の声の大合唱であることを示すものだった。（中略）シアトルは主体の視点、抗議行動参加者の視座から、グローバル・システムに対する異議申し立てリストの首尾一貫性を実証してみせたのだ。⁽¹⁵⁾

つまり〈帝国〉権力に対する抵抗の優位⁽¹⁶⁾を強調しながら、彼らの行き着く先は絶対的民主主義——全員による全員の支配——である。しかもこの絶対的民主主義の実態は、マルチチュードの運動を通じて獲得されるはずのグローバル市民権等の諸権利である。絶対的民主主義の可能性を彼らは以下のように論じている。

この戦争に対抗する民主主義こそ「絶対的民主主義」にほかならない。またこの民主的運動は、〈帝国〉の主権の権威と被従属者の同意との結びつきを断ち切ろうとするマルチチュードの運動を伴うかぎりにおいて、「脱出」のプロセスとも呼ぶことができる（後略）。⁽¹⁷⁾

ここで絶対的民主主義の実態について二つの素朴な疑問が登場する。第一はトランスナショナルな抗議行動・異議申し立てを

まずムフにとつての単数のデモクラシーに対する論点ははっきりしている。つまり合意に基づく政治というのは近代民主主義の萌芽期においては大きな役割を果たしたかもしれないが、現在では民主主義そのものの「主たる障壁」となっている。なぜならば民主主義的な合意はただ闘争的な合意でなければならないからである⁽¹⁹⁾。つまりハーバーマスのように「理想的発話状態」を設定して、自由な「合意」や最終的な「社会的合意」を導こうとすることは、他者の存在をより根源的な仕方ですべて排除していることになるのである⁽²⁰⁾。つまり合意に基づく「公共圏」という想定は対立と分裂が消滅するというアブリオリな価値判断を含んでおり、政治的なものとの契機は忘却されている。このモデルにおいては民主主義的対話や公共圏への参加には同意するが、それをどのように定義し、どのように実践するのかという点で異なった解釈や方法を持った他者の立場は、排除される。

その原因は、自由な討議という問題設定が最初から、排除なき合意の可能性を想定してしまっていることに伏在している。公的討論の過程は理想的発話状態を体現しなくてはならないため、公平・平等・開かれた価値を必要とする。そして、共通の関心事項についての自由で制約のない討議というものは「我々／彼ら」の境界線を許容しない。言うなれば「民主主義の行使の可能性の条件そのものが、同時に討議民主主義が構想する民主主義的正統性の不可能性の条件」を形成しているのである⁽²¹⁾。

ムフは「異質な他者」の存在を承認しながら、民主主義的対話の方向性を再考していく。つまり意見や解釈について「異質な他

者」の存在を不可視化するのではなく、対立や衝突を起り得る除去不可能なものとして認め、他者を「敵」ではなく、対等な「対抗者 (adversary)」として承認するということである。論争相手は闘技場における競争者であり、意見や解釈の違いはあるが、その事は彼らの正当性を否定するものではない。公と私、市民と個人との間の関係性はどちらかが消滅してどちらかに移行するというわけではなく「けつして調停され得ない永続的な緊張関係」として残っていく。⁽²¹⁾ これらの関係性を結論付けるならば、ムフにおいてシティズンシップとは節合の論理なのである。つまりシティズンシップの概念とは、

すなわち、ラディカル・デモクラシーの立場からなされる自由と平等の原理の解釈に共同して同一化することを通じて「われわれ」を構成すること、言い換えれば、民主主義的等価性の原理によってさまざまな要求を節合すべく、それら諸要求のあいだに等価性の連鎖を構成すること、これである。⁽²⁴⁾

そして上述のような立場からムフは一連のデモクラシー言説への批判を展開する。ムフに拠れば、「討議民主主義」・「熟議民主主義」・「コスモポリタン民主主義」・「良い統治論」・「グローバル市民社会論」・「コスモポリタン主権論」・「絶対的民主主義」等は、政治空間における抗争性を埒外に置き「政治的なもの」を忘却した思想傾向である。⁽²⁵⁾

先ず民主的トランスナショナルリズム⁽²⁶⁾は、世界の市民の声を吸

政策決定が国家に影響を及ぼす過程で民主的な決定が行われるので、国際機関そのものの有効性を疑問視するのは適切ではないと述べている。他方で、カルドーはグローバルな民主主義の実現に向けてグローバル市民社会に非常に高い評価を与えている。カルドーによればグローバル市民社会への参加が政治的熟慮を促すものなのである。ムフにとっては、両者の見解がまさにコスモポリタニズムの問題点を例証している。それはコスモポリタニズムが、権力関係が社会的に構成されるという視点を無視して、ヘゲモニーを超えた政治を画策しようとしている点に尽きる。コスモポリタニズムは、ヒューマニズムと合致した権利と義務を同等に有する市民の存在を想定しているが、これはまさに「危険な幻想」である。⁽³¹⁾

更にハート・ネグリの絶対的民主主義に触れ、彼らのプロジェクトは予期せぬ形で自由主義的コスモポリタニズムと結託して、主体間における闘技性、抗争性が否定されていると非難している。つまり「帝国」や「マルチチュード」で展開された所論は「コスモポリタニズムの超左翼版」に過ぎないのであり、グローバル市民社会への樂觀論は温存されたままになっている。⁽³²⁾

即ち、ハート・ネグリは現在進行形のデモクラシーにおける代表制の危機に着目し、マルチチュードの絶対的民主主義に期待を寄せているわけだが、ラクラウ・ムフにすればそれこそがまさにコスモポリタニズムと同様の危険な妄想なのである。次節では、ラクラウ・ムフのハート・ネグリ批判に焦点を絞り、なぜ彼らが「帝国」・「マルチチュード」を論難するのか、その論理を探つ

い上げるためのグローバル機関、即ちグローバル議会 (Global Parliamentary Assembly) の必要性を説いている。しかし、ムフに言わせればこの種の議論は、伝統的な自由主義と同様に、国家を諸悪の根源と看做し市民社会の可能性を過大評価している。つまり、脱領域化と脱国家化をキー概念に用いながらグローバル市民社会がグローバルな民主主義プロジェクトを推進すると考えているが、それはグローバルな公共圏による自由な討議と合意が可能であるという樂觀論に基づいている。⁽²⁷⁾

同様にコスモポリタン民主主義の議論⁽²⁸⁾は、普遍的諸価値を想定し国民国家の制約を超えた人権や民主主義についての基準を策定しようと試みている。しかし結果としてこのようなコスモポリタンな政治思想は、彼らが普遍的であると信じる単一のモデルを打ち立てる結果に終わる。そしてそれは民主主義や人権についての西洋的価値の世界支配を招来する。⁽²⁹⁾

またグローバル・ガヴァナンスに対しては、技術的な政治課題を解決することに注目する一方で、市民の自立的な政治参加や権利についてあまりにも寡黙であると批判している。その上でこうした傾向においては、ましてや闘技的民主主義モデルにおけるヘゲモニー実践―特定の政治言説が差異を残した形で形成・強化されていく過程―には目も向けられないと悲観論を展開している。更にグローバル・ガヴァナンスに関連して、ダールとカルドーの所論⁽³⁰⁾に厳しい批判を加えている。一方でダールは国際機関における政策決定には市民の声は反映され難いので国際機関に民主主義を求めるのは不可能であると論じているが、国際機関における

ていく。

ラクラウ・ムフのハート・ネグリ批判

ラクラウ・ムフの立場からすれば、ハート・ネグリの多数性のプロジェクトは最初から失敗を運命付けられている。それは政治的なもの (the political) という抗争性の領野を捉え損ね、その結果如何にして特定の運動が政治的ヘゲモニーを構成し得るのかという、まさしく政治的な問いが欠落してしまっているからである。

ラクラウとムフは、それぞれ個別にハート・ネグリへと反駁している。その批判内容は、厳密に見ていけば詳細な立論や強調点の違いはあるが、概ね次の二つの点に集約されている。第一に、ハート・ネグリの立論はマルチチュードのヘゲモニーを構築する過程で、近代的な二項対立の論理、伝統的マルクス主義に典型的であった決定論を密輸している。結果、彼らの議論は脱構築から構築へと向かう公準破りが顕著となっている。その原因は何かといえは、彼らが政治的なもの、敵対性の次元をほぼ無視しているということに尽きる。

第二に、第一点目の公準破りの必然的帰結としてハート・ネグリの議論には如何にしてマルチチュードが「帝国」に抗う主体となるのかという政治的連帯・節合の論理が欠落している。ラクラウ・ムフの術語を用いれば、ハート・ネグリはマルチチュードという「帝国」時代における抵抗概念を打ち立てたことで満足してしまい、そのマルチチュードが如何にして「等価性の連鎖」を築

き上げるのかという問いを立てていない。言うまでもなく、ラク
ラウ＝ムフにとってマルチチュード（多様な主体の連帯可能性）
というのは出発点ではあるがゴールではない。

まずラクラウは、ハート＝ネグリに政治的なものが欠落して
いることを厳しく指摘する。つまり政治とは「敵対性の概念」ま
たはその亜種であり、我々が直面するラディカルな社会対立、ま
さしく政治的なものと呼び得るものを受け入れることによって
のみ「可能となるのである」。⁽³³⁾ラクラウにとって参照すべき概
念は「人民」であるのに対して、ハート＝ネグリの基本的参照項
はマルチチュードである。このことは分析的視座において次のよ
うな差異を生む。ラクラウが「人民」の構成過程に着目し、人民
という「空虚な記号」が如何にして等価性の連鎖を構築し、ポピ
ュリズムへと至るのかを捉えようと試みているのに対して、ハー
ト＝ネグリはマルチチュード形成を単純化し、「人は抑圧に対し
て自然と立ち上がる」という安易な結論を導いてしまっている。⁽³⁴⁾
これはハート＝ネグリが政治的なもの——つまりマルチチュード
を構成する主体間での対立や衝突——を想定せずに、「帝国」に抵
抗する主体としてのマルチチュードに同一性・正当性を付与した
ために生じている。換言すれば、ハート＝ネグリにとって「帝
国」／マルチチュード、権力／抵抗というお決まりの二分法が本
質化され、マルチチュードの連帯がそもそもどのように構成され
るのかという政治的な問いが駆逐されているのである。

そしてこの第一の論点は直ちに第二の論点へと接続される。つ
まりハート＝ネグリは多種多様なネットワークの連帯の可能性に

の——合意を政治の中心的課題とする思想の蔓延と政治的なもの
の次元を抹消する思想運動——の一翼として捉えている。結局こ
のことは、政治における情念の軽視——ムフは情念を合意や理性の
対置として用いている——へと帰結する。政治における合理性の強
調は願望・感情・情緒を不可視化させる。⁽⁴²⁾結果的にこうした情
念への軽視は敵体性の次元への過小評価へと導かれる。

ムフの視座は異質なものの同士が如何に節合するかという観
点である。それ故に彼女自身が認めるように、ラディカル・デモ
クラシーとは絶対的多元主義でも極端なポストモダンリズムでもな
い。⁽⁴³⁾そしてハート＝ネグリにはこの異質なものの同士が如何にし
て等価性の連鎖を構築していくのかという視点が欠けている。

つまりハート＝ネグリのマルチチュードとは「等価性の連鎖」
なきヘゲモニーの構築であり、かつての第二インターナショナル
の決定論的革命的焼き直しに過ぎないのである。ハート＝ネグ
リが世界社会フォーラムに寄せた序文にはそのことが如実に現れ
ている。それによれば、ポルトアレグレは「政治的羅針盤を明確
にする、実在する神話」であり、「マルチチュードの偉大な運動
を、代表するもの」となったのである。⁽⁴⁴⁾（ポルトアレグレ）は
「ダボス」を政治的他者として差異化することによって自らの正
当性を高めている。

一月のブラジルの猛暑と、スイスの積雪とのコントラストは、
二つの政治戦略が正反対であることを、反映している。ふたつ
の場所は、相対してはいるが、相同の関係にはない。ふたつの

については雄弁であるが、そうした多様なネットワークは如何にし
て結合させていくのか、その「節合」について何も語っていない。⁽³⁵⁾
その意味で「マルチチュードは独りでに多数的となるわけではな
い、そうなり得るのは政治実践を通じてのみである」。⁽³⁶⁾最終的
にこの「節合」の論理が欠如しているがゆえに、帝国からマルチ
チュードへの転回が単なる夢物語のような理想主義的修辭の繰り
返しになってしまっている。⁽³⁷⁾

ハート＝ネグリに対する批判の矛先はムフにおいても同様であ
る。ムフはハート＝ネグリのマルチチュードに確たる政治戦略——
彼女の言葉を用いるならば政治的節合の契機——が決定的に抜け落
ちていることを厳しく論難している。⁽³⁸⁾つまりハート＝ネグリは
「諸運動の運動」と称して異種混交的な運動体の連帯を強調して
いるが、実際にどのような政治言説の構築を通じて、どのように
マルチチュードがヘゲモニックな運動となり得るのかについて全く
検証を行っていない。彼女の言葉を借りれば、マルチチュードがど
のように革命の主体となるのか？という問いが欠如している。⁽³⁹⁾

ここから更にムフの独自の視点を導くならば、彼女にとってハ
ート＝ネグリの議論が政治的なものの位相を見落とし、マルチ
チュードという決定論・理想論へと還元されていくことは、まさ
にラクラウとムフがこれまで積み上げてきた伝統的マルクス主義
の決定論的思考からの転回を無効化してしまう許し難い理論的後
退なのである。⁽⁴⁰⁾それ故にハート＝ネグリはマルクスの末裔とい
うよりは、ムフが手厳しく喝破するように「第三の道」の亜種な
のである。つまりムフはハート＝ネグりを、ポスト政治的なもの

ものは、お互いを写し合う鏡像ではないのだ。ダボスの会議は、
少数のエリートに限定され、武装した護衛に守られている。ダ
ボスは、山頂に封じ込められた狭い支配者たちに限られている
のに対して、ポルトアレグレは、平原に広がる無限のネットワ
ークなのである。⁽⁴⁵⁾

このようにポルトアレグレ／ダボスという二分法を強調する一
方で、如何にして「ポルトアレグレ」の等価性の連鎖を築き上げ
るのかという問いは決して考慮されない。マルチチュードは常に
既に「多様な運動体によるひとつの運動（the movement of
movements）」、「多様なネットワークによるひとつのネットワー
ク（the network of networks）」であり、多様な関係性をどのよ
うに保持し定着化させるのかという問いは等閑に付される。しか
しこのような言説はマルチチュードの根本的性質を既に規定して
いる。マルチチュードは単一（the movement / the network）
であり多様（movements / networks）であるという。それは差異
を残したまま共有性を基軸に政治的フロンティアを構築するヘゲ
モニーである。彼らは続ける。マルチチュードの運動は「差異を
増殖させながら、共有部分を広げていく（中略）あらゆる差異は、
有機的に構成する投企なのである」。⁽⁴⁷⁾ここにある種のマルチチ
ュード原理主義のようなものが潜んでいることは偶然ではない。
彼らは次のようにも論じている。

多様な運動体によるひとつの運動は、ここにおいては、組合に

対してさえも、ヘゲモニーの位置を占めることができる。労働組合が部分的利益を守る一方で、運動は、働くすべての人びとの一般的利益を代表することができる。組合が特定の階級利益を表明する一方で、運動は、マルチチュード全体の行為を表現することができる。(中略) 運動だけが、ファシズムを、原理主義を、そして帝国主義を、それが世界のどこで、どのように出現しようとも、打ち砕くことができる。⁽⁴⁸⁾

それは、マルチチュード／労働組合、一般的利益／部分的利益、全体の行為／階級利益という二項対立の再生産である。ハート＝ネグリは「帝国」と「マルチチュード」という二元性を構築しているに過ぎない。故にグラムシにとってロシア革命が「資本論」に反する革命 (revolution against Capital) であつたように、ポルトアレグレも「帝国」に反する運動 (the movement against Empire) なのである。彼らの分析座標は、「帝国」から「マルチチュード」に至る過程で抵抗の再本質化へと収斂していく。ポルトアレグレはまさにその収斂の絶頂である。こうした脱構築から構築への公準破りはヘゲモニーの政治的特性、または避けることの出来ない政治的ジレンマを白日の下に晒してしまふ。例えばある論者はヘゲモニーの両義性について次のように語っている。

ヘゲモニックな集合体が構成されるに当たって重要な契機は「外的な敵」との対峙である。いかなるヘゲモニーも、カウ

ターなる契機を不可欠とする。反福祉国家や反民主主義、反官僚制、反権威主義、反ネオリベラル・グローバリゼーションといった契機を。カウ・ター・ヘゲモニーは、カウ・ター・ヘゲモニーであると同時にカウ・ター・ヘゲモニーである。(中略) ヘゲモニーとカウ・ター・ヘゲモニーの差異を絶対化することは、本質主義を再導入し、ヘゲモニーの存在論的消滅を招くことと同義なのである。⁽⁴⁹⁾

つまり、マルチチュードを論じ、ポルトアレグレを絶賛するハート＝ネグリの中に、この種の本質主義の再導入が有りはしないだろうか。ハート＝ネグりが「帝国」権力を解体しようとしていること、ここまでは理解可能である。しかしながら、「帝国」を脱構築すること、その裏返しとしてマルチチュードを構築することは同義ではない。彼らは「帝国」／マルチチュードの二項対立を絶対化することによって本質主義を密輸しているのである。そして、マルチチュードという運動・ネットワークは超コード化され、どのようにマルチチュードそのものを構築していくのかという問いは問われない。このことは第二インターナショナルの支配言説がプロレタリアートというコードを絶対化し、プロレタリアートがどのように他階級と等価性の連鎖を築き上げるのか、それを不可視化していたこととパラレルである。ハート＝ネグリの所論がこのような帰結へと至るのは、彼らが先行するデモクラシー論と同様に「境界線なき政治」を目指し、そうした多様性の連鎖をアブリオリに想定することによって、その多様性の網の中で

生じる対立や差異の領域を十分に認識できていないことから生じている。

結び

本稿ではハート＝ネグリとラクハウ＝ムフの二つのポスト・マルクス主義を検証した。両者共に現存するデモクラシーについての危機への応答として論を立てている。特にハート＝ネグリはグローバルな「帝国」における代表制の危機からマルチチュードの絶対的民主主義へと傾倒している。しかし、ラクハウ＝ムフによれば、それこそがまさに危険な誘惑であり、熟議民主主義と同様に政治的なもの、抗争性の次元を捉え損なつたものである。そして政治的なものの位相が欠如しているが故に、マルチチュードには多様なネットワークを如何にして築き上げていくのかという政治的な問いが回避され、抵抗が権力に優越するという楽観論へと帰着している。ラクハウ＝ムフのラディカル・デモクラシー論はそうした政治的なものの欠如を忌避し、抗争が除去不可能であるという前提に立ちながら、多様な主体間を揺れ動く網の目の中で如何にして等価性の連鎖を構築するのかという問いかけを行っている。このことはデモクラシーという次元の孕む排除や疎外といった問題を根源的に問い直すものとして我々に多くの示唆を与え続けてくれるものであらう。

註

(1) キヤロル・グラック「二十世紀の語り」(梅崎透訳)『日本の歴史』二五 日本はどこへ行くのか、講談社、二〇〇三年、三六―三七頁。傍点筆者。

(2) 前掲書、二二、四四頁。

(3) 例えば、Michael Hardt and Antonio Negri, "Adventure of the Multitude", *Rethinking Marxism*, vol.13 No.3/4, 2001.

(4) 以下の拙稿を参照。「普遍／個別をめぐる境界の政治学—エルネスト・ラクハウの政治思想」、『情況』二〇〇六年九月・十月号、「テロとの戦争」と政治的なものの政治学—シヤンタル・ムフの国際政治思想への展開、「政治思想研究」、第七号、二〇〇七年近刊。

(5) Michael Hardt and Antonio Negri, *Empire*, Cambridge: Harvard U.P., 2000 (=水島一憲他訳「『帝国』」, 以文社、二〇〇三年)。

(6) Michael Hardt and Antonio Negri, *Multitude*, New York: Penguin Press, 2004 (=幾島幸子訳「マルチチュード(上)(下)」, NHKブックス、二〇〇五年)。

(7) *Ibid.*, p.232. 訳書(下) 七九頁。

(8) *Ibid.*, p.295. 訳書(下) 一七三頁。

(9) *Ibid.*, p.351. 訳書(下) 二五三頁。

(10) *Ibid.*, p.354. 訳書(下) 二五九頁。

(11) *Ibid.*, p.347. 訳書(下) 二四八頁。

(12) *Empire*, op.cit., p.396-p.411, 訳書四九三―五〇九頁。

(13) *Multitude*, op.cit., p.269-p.270, 訳書(下) 一三五頁。

(14) *Ibid.*, p.285. 訳書(下) 一五八頁。

(15) *Ibid.*, p.288. 訳書(下) 一六四頁。

(16) *Ibid.*, p.64. 訳書(上) 一三三頁。

- Shapiro and C. Hacker-Cord, n(ed.), *Democracy's Edges*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999, Mary Kaldor, *Global Civil Society: An Answer to War*, Cambridge: Polity Press, 2003.
- (1) *On the Political*, op.cit, p.103-p.106.
- (2) *Ibid*, p.107-p.115.
- (3) Ernesto Laclau, "Can Immanence Explain Social Struggles?" in P. Passavant and J. Dean (ed.) *Empire's New Clothes*, London: Routledge, 2004, p.24.
- (4) Ernesto Laclau, *On Populist Reason*, London: Verso, 2005, p.241.
- (5) Laclau, "Can Immanence Explain Social Struggles?", p.29.
- (6) *Ibid*, p.30.
- (7) Laclau, *On Populist Reason*, op.cit, p.243.
- (8) *On the Political*, op.cit, p.107-p.115.
- (9) *Ibid*, p.39.
- (10) Chantal Mouffe, "Messianic Multitudes", *The CSD Bulletin*, vol. 11 No. 2 Vol. 12 No. 1 (double issue), University of Westminster, 2004-5, p. 38.
- (11) Chantal Mouffe, "Which public sphere for a democratic society?", *Theoria: A Journal of Social and Political Theory*, vol. 99, 2002.
- (12) Chantal Mouffe, *Politics and Passions: the stakes of democracy*, Centre for the Study of Democracy, University of Westminster, 2002.
- (13) Mouffe, "Democracy: Radical and Plural", *The CSD Bulletin*, vol. 9 No. 1, University of Westminster, 2001-2, p. 10.
- (14) William Fisher and Thomas Ponniah (ed.), *Another World is Possible*, London: Zed books, 2003, p. xvi. (= 加藤哲郎訳「ふつとこの世界は可能だ」日本経済評論社 二〇〇三年 五頁)。

- (17) *Ibid*, p.90-p.91. 訳書 (上) 一六二頁
- (18) Ernesto Laclau and Chantal Mouffe, *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, London: Verso, 1985 (= 山崎カール訳『ネスロー・マルクス主義と政治』大村書店 一九九二年)。
- (19) Chantal Mouffe, "Schmitt's challenge" in Chantal Mouffe (ed.) *The Challenge of Carl Schmitt*, London: Verso, 1999, p.4. (= 古賀敏太他訳『カール・シュミットの挑戦』風行社 二〇〇六年 六頁)。
- (20) Chantal Mouffe, "Deliberative Democracy or Agonistic Pluralism?", *Social Research*, 66-3, 1999, p.749.
- (21) Chantal Mouffe, *The Democratic Paradox*, London: Verso, 2000, p.48-p.49. (= 葛西弘隆訳『民主主義の逆説』以文社 二〇〇六年 七六頁)。
- (22) Chantal Mouffe, "Schmitt's challenge", p.4. 訳書六頁。
- (23) Chantal Mouffe, *The Return of the Political*, London: Verso, 1993, p.72. (= 千葉真他訳『政治的なものの再興』日本経済評論社 一九九八年 一四六頁)。
- (24) *Ibid*, p. 70. 訳書 一四二頁。
- (25) Chantal Mouffe, *On the Political*, London: Routledge, 2005, p.1-p.2.
- (26) Richard Falk and Andrew Strauss, "Toward Global Parliament", *Foreign Affairs*, Jan.-Feb. 2001.
- (27) *On the Political*, op.cit, p.93-p.96.
- (28) Daniele Archibugi and David Held (ed.), *Cosmopolitan Democracy: An Agenda for a New World*, Cambridge: Polity Press, 1995.
- (29) *Ibid*, p.97-103.
- (30) Robert Dahl, "Can International Organizations be democratic? A Sceptic View" in I.
- (45) *Ibid*, p. xvi-p.xvii. 訳書六頁。傍点筆者。
- (46) *Ibid*, p. xvii. 訳書六頁。
- (47) *Ibid*, p. xvii. 訳書七頁。
- (48) *Ibid*, p. xix. 訳書九頁。傍点筆者。
- (49) 野崎孝弘「越境する近代」、国際書院、二〇〇六年、一九八—一九九頁、強調原文。

マルクスが(を)リサイクル

加速度的に表層化するグローバル化と社会深部における「人間」の最終的破壊のなかで、私たちはいま、どのように政治化できるか。いままだ妖怪は徘徊している。先鋭的思索者ジジエクは、マルクスがリサイクルすることを知らせ、マルクスをリサイクルする道を提示する。長原豊訳

スラヴォイ・ジジエク著 長原豊訳

一四〇〇円＋税 [発行所] 情況出版